

大学入試改革フォーラム ～高大接続をテーマに～

■ 事例報告

アリソン・ビール（オックスフォード大学日本事務所代表）

本日は英国の大学入試制度を紹介します。オックスフォード大学は英国の大学の中でも、将来リーダーになる資質のある、学業的に優秀な学生を選抜する特別な選抜方法があります。

まず、英国の入試制度を理解するために、教育制度の概要を知る必要があります。英国の教育制度は、地方によって異なります。イングランドの一般的な制度を説明します。英国は4歳、もしくは5歳で学校教育が始まり、16歳までが義務教育です。16歳の時に、GCSEという統一試験を受けます。一定以上の成績を収め、進学したいと思う学生は、その後2年間、勉強して18歳の時に、GCE-Aレベルという統一試験も受けます。試験機関が実施しています。その上に、OFQUALという機関が監修し、質の保証をしています。政府が設立し、政府から予算をもらっていますが、政府から一定の距離を置いて、国民のため、公的な業務を行っている団体で、試験の水準と信頼性を維持しています。どの試験機関を使うかは各学校が決定します。



学生は16歳で10～12科目のGCSEを受けます。英国の制度では、早い時期に専門を決めてしまうという特徴があります。18歳のAレベルは、だいたい3科目だけです。すべての試験は記述式で、時間内に問題を解くか、エッセーを書きます。選択肢型の試験問題ではありません。来年から新たな成績評価基準が導入されますが、現在のところ、GCSEの成績はA*からGまでです。Aレベルの成績評価はA*からEまであります。統一試験で取った成績は、その人が生涯使う資格となり、就職や進学の時によく使われます。国の統一試験があるため、英国の学校は義務教育の修了書や卒業証明書のような書類は一切出していない。どの学校に行ったかとか、どの学校を卒業したかは、まったく意味がなく、GCSEとAレベルでどういう成績を取ったかがすべてです。

英国には、16歳の子どもは75万人います。1人あたり、だいたい10科目の試験を受けます。すべての試験が選択肢型ではなく、記述式試験だということを考えると、試験の採点が一つの大きなプロジェクトになります。この統一試験の採点をするため、試験機関が大量の採点官をパートタイムで雇っています。この採点官は科目の専門家で、学校の先生や退職したばかりの教員が多いです。採点官になるために厳しい採用プロセスを経て、細かいトレーニングを受けます。統一試験は厳しい体制で、学生の所属する学校で試験が行われますが、もちろん、採点官は絶対に自分の学校や地域の学校や関わりのある学校のペーパーは採点しません。3段階の質保証システムがあります。

- ①すべての採点のうちから、無作為に答案を出して、別の採点官が再び採点します。
- ②採点が終わったら、コンピューターが学生が取った点数と、その学生の先生が事前に予想した成績をコンピューターに入れて、2点以上のずれがあったら、再度、採点をし直します。
- ③結果が出た後、生徒が不服があって、学校がサポートすれば、再度採点してもらえる制度もあります。

そういうことで、統一試験は国民から信頼される制度となり、就職や進学の際に広く使われています。

大学入試改革フォーラム ～高大接続をテーマに～

さて、この統一試験が大学入試とどういう関係があるのでしょうか。統一試験は大学の選抜に重要な役割を果たしていますが、すべてではありません。学生はAレベルを受ける前に、大学に出願します。英国では、大学入試を一括管理する機関UCASがあります。オックスフォード、ケンブリッジを含め、ほとんどすべての大学が国立大学です。私立大学は本当に少ない。すべての大学はUCASを使って、入試選抜をします。英国の大学入学希望者は1つのアプリケーションを書いて、5つの大学まで出願できます。UCASは仲介役を果たしています。UCASは出願に不備がないかをチェックして大学に送ります。UCASは各大学からのオファーを管理し、すべての学生とのやりとりに責任を持ちます。オンラインでGCSEの成績や、アルバイトや仕事の履歴を書く欄があります。学生は将来やりたいことや自分をPRするパーソナルステートメントを書かなければなりません。これは重要です。そして、学校の先生の推薦状も必要。推薦状の中で、先生はAレベルの予想成績を書きます。各大学は、すべての書類に基づいて学生を選抜し、条件付きオファーを出します。Aレベルの結果が出る前に、通知をするので条件付きオファーになるのです。

Aレベルは2年間のコースで、10月から始まり、2年目の1月にUCASの締め切りがあり（※オックスフォード大学の場合、締め切りは10月）1月と3月の間に各大学がオファーを出します。5月か6月に学生がAレベルを受けて、8月にAレベルの結果が出ます。条件付きのオファーを満たしていれば合格になります。満たしていない場合は、UCASと相談して、最終的に落ちた学生と、空きのある大学のマッチングシステムがあります。そして、9月から10月にかけて新学年が始まります。

オックスフォード大学は普通の国立大学ですが、学業的に最も優秀な学生を選抜したいと思っています。オックスフォード大学では、チュートリアルという特別な教育制度があり、毎週、学生は莫大な量の課題図書を読書をこなし、教授のアドバイスを受けながら、独学でエッセイを書いて、教授と1対1または1対2とかの小規模環境で1時間議論します。ですから、こういう厳しい学習環境でも忍耐強く勉強し、結果を出していくような伸びしろのある学生を探しています。選んだ科目にパッションをもって好奇心にあふれ、コミュニケーション力があり、将来リーダーになる子を選抜しようと思っています。オックスフォードの選抜は完全に学問の能力に基づきます。スポーツやボランティア、趣味やコネなどは、まったく関係ありません。

オックスフォード大学は、ほかの大学と同じように、UCASを通じて出願を受け付けます。上限5校まで選べる大学の選択肢の一つになります。しかし、オックスフォードでは、もう少し学生の能力を知るために、UCASに加えて論文のサンプルの提出を求め、適性試験、面接も行います。論文のサンプルですが、主に人文系や社会科学系など、書き言葉のコミュニケーションを大切にする科目に出願するときに必要になります。学生が学校で宿題として論文を書き、教師に採点してもらったオリジナルの論文を提出します。長さは2000語まで。学生は一番自信をもった論文を出します。

オックスフォード大学の適性試験（APTITUDE TEST）は、特定の試験機関が実施し、自分の学校で受けることができます。特定の知識ではなく、幅広く、その分野の原則やアイデアを把握し、適用できるかどうかというテストです。たとえば、歴史の適性試験に次のような問題が出ます。「宗教や人の信念がきっかけとなった歴史上の事件について書いてください。どの事件でも、どの時代でも、どの国でも構いません。そのとき宗教や人の信念はその事件にどのような役割を果たしていたか分析してください」

毎年、オックスフォードの出願者総数は18000人以上。大学教授がすべての学生のアプリケーションの

大学入試改革フォーラム ～高大接続をテーマに～

書類を見て、興味のある学生を面接します。最終的に合格に達する学生は3200人ですが、1万人の学生の面接を行います。

面接は学生1人に、最低で教授2人。男女1人ずつで、20分から30分のインタビューをしています。オックスフォードの面接は面白くて難しいということで、英国の中で有名です。教授のする質問は事前に決まっておらず、学生によって違います。インタビューのはじめに、簡単な質問をします。たとえば、「どうしてこの科目に興味があるか」、「どうしてオックスフォードで学びたいか」、「今、どんな本を読んでいるか」など、だれでも簡単に答えられるもの。その後、もう少し深く、哲学的な質問をします。今までこのような質問が出たと言われています。たとえば、「世の中に砂粒はどれくらいあるか」、「なぜ、人間の鼻の穴が2つなのに、口は一つなのか」、「熱気球でゾウを持ち上げるためには、気球の中の空気は何度にしたらいいか」

教授が求めるのは正解ではなく、学生はどのように問題にアプローチするか、問題を解くための原則を理解しているか、自分の考えをちゃんとコミュニケーションできるか、創造力や好奇心があるか、教授は学生をプッシュして、新しく与えられた情報をどのように処理するか、マインドの柔軟性があるかどうか、突っ込んで学生と議論します。インタビューの後、その科目の教授はミーティングをして、すべての情報、すなわち、今までの成績、パーソナルステートメント、学校の先生の推薦状やAレベルの成績、論文のサンプル、インタビューの内容などをすべて参考にして、条件つきオファーを出します。オックスフォードの場合、オファーの最低条件は、一般的にAレベルの成績はA*A*AからAAAの間です。つまり、幅があります。完全にAレベルのトップの学生のみを単純に選抜するのではなく、幅のあるトップクラスの成績をもつ学生の中から、教授が実際に面接して、その学生の出している結果をみて、一番伸びしろのある学生を選びます。可能性が大きいと考えられる学生を選抜します。

必ず日本で聞かれることは、落ちた学生と両親に、不合格の根拠をどうやって説明するか。多分、質問の裏には、合否結果は試験の点数に基づいていないので、平等ではないという疑問があるからだと思います。クレームはありますが、そこまで多くありません。学生には、それぞれ長所や短所があり、性格もコミュニケーション能力も伸びしろも違います。大学の判断で合格・不合格を決めるのは社会的に当然のことだとみなされています。英国では入試が平等であること、フェアであることは大変重視されています。平等、フェアという概念は、日本と違うかもしれません。日本では、同じ試験で同じ採点で数字を出して、ランキングをして、上から何人が合格するという方法で選抜をすることが多いと聞いています。客観的、数値ベースに基づいた基準で選考されます。英国では、大学の選抜試験の点数だけで決めるのはフェアではないと見なされています。なぜかという、試験に重きを置くだけだと、学生は実際の学習を犠牲にして、試験に合格するための勉強をすることがあります。こうなると、教育の本当の目的や意味がなくなってしまいます。そういった状況に置かれる子どもがかわいそうだと思います。ペーパーテストに重きを置くだけだと、経済的に裕福な家庭は子どもを塾や入試対策に力を入れる私立学校に送り、経済的に余裕のない家庭に生まれた子どもにはフェアではありません。このようなソーシャルモビリティの課題は英国ではひとつの大きな問題になっています。さらに、試験当日の体調不良や、人生の出来事、家族の問題が試験成績に大きく影響することもあります。すべてを試験の結果に任せるのはフェアではないと思います。そして、1点や2点の差で、能力の差があるかは疑わしい。数値だけで客観的に採点した試験は本当に平等なのかという疑問が生じます。むしろ、学生の能力を示すたくさんの情報を、経験のある、社会的信頼のある教授が、ある意味で主観的にみただろうかという考えが、英国の入試制度だと思います。英国では、私たちの制度はフェアであると思っています。

大学入試改革フォーラム ～高大接続をテーマに～

オックスフォードの入試制度は、大変時間やお金がかかる制度です。大学の教授は、毎年1万人もの学生を最低2回面接しなければなりません。学生の交通費や宿泊費や食費は、すべて大学が負担します。しかし、オックスフォードは研究や教育の面で世界をリードするのがミッション、使命だと思っています。世界のトップ大学として、それだけ力を入れるのは当然だと考えています。数日前に、タイムズハイヤーエデュケーションの世界大学ランキングで、オックスフォード大学は1位になりました。世界のトップ大学になるために人材を選抜する時、これほどまでの労力をかけなければならないのかもしれない。